

## ルカによる福音書6章1-45節 「御国の新しい始まり」

### 1A 安息日の主 1-11

1B 憐れみにおいて 1-5

2B 善行において 6-11

### 2A 十二使徒による宣教 12-19

1B イエスによる選び 12-16

2B 大勢の弟子と群れ 17-19

### 3A 平地の説教 20-45

1B 幸いな人と哀れな人 20-26

2B 敵への愛 27-38

1C 自分を憎む者への愛 27-30

2C 見返りのない愛 31-36

3C 裁くことへの戒め 37-38

3B 自己の訓練 39-45

## 本文

ルカによる福音書6章に入っていきます。イエス様が、神の国の福音を宣べ伝え始めました。それは、イザヤ書に預言されていた、貧しい人々への良き知らせでした。貧しい人々と言っても経済的な困窮だけを意味するのではなく、いろいろな意味で自分には何もないと知っている人々であります。その人たちに罪の赦しを宣言し、そして罪から派生するいろいろな縄目から解き放つことを意味していました。私たち教会に集う者たちは、そのキリストの働きの中にいる者たちです。罪が赦され、これまで縛られていたものを解き放たれ、自由にされた者たちが喜んで、神を王として仕えている者たちであります。

イエス様のこのような働きに対して、ユダヤ教の人々が、その新しい働きを受け入れられない姿を見ました。イエス様が、中風を患う者に、「あなたの罪は赦されました」と宣言されたら、「神を冒瀆している。罪を赦すことのできる方は神のみだ。」と心の中であれこれ考えました。そこで、イエス様は、ご自身の罪を赦す権威があることを示すために、その中風の者をすぐに癒され、彼は立ち上がることができたのです。また、取税人レビ、つまりマタイがイエス様に付いて行きました。彼はその救いの喜びから、仲間の取税人を集めて、イエス様のために盛大なもてなしをしました。それで罪人と食事をしているからという理由で文句を言いました。また断食をしないのか？と言いました。そこでイエス様が答えられたのは、喩えです。新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れなければいけない、ということです。

私たちがこれから見ていくのは、その新しいイエス様の働きです。イエス様が私たちと共におら

れる時、主は新しい働きを始められます。しかし、これまでの古い皮袋、自分の先入観であったり、自分の快適さであったり、自分に得になるようなものですね、そういった古いものが新しい働きに邪魔になるのです。私たちがいつも、新しい働きの中にいるためには、自分自身が聖霊の力によって、変えられていかなければいけません。

### 1A 安息日の主 1-11

イエス様の働きにおいては、安息日についての掟が大きな衝突となりました。

### 1B 憐れみにおいて 1-5

1 ある安息日に、イエスが麦畑を通っておられた時のことである。弟子たちは穂を摘んで、手でもみながら食べていた。2 すると、パリサイ人のうちの何人かが言った。「なぜあなたがたは、安息日にはしてはならないことをするのですか。」3 イエスは彼らに答えられた。「ダビデと供の者たちが空腹になったとき、ダビデが何をしたか、4 どのようにして、神の家に入り、祭司以外はだれも食べてはならない臨在のパンを取って食べ、供の者たちにも与えたか、読んだことがないのですか。」5 そして彼らに言われた。「人の子は安息日の主です。」

安息日に弟子たちが、麦畑を通っている中で、その中にある穂を摘んで食べていました。私たちには、人様の畑で盗んでいるでしょうか？と思うかもしれませんが、そんなことはありません。私が聖地旅行に行った時に、勝手にキブツの中に入って行きましたが、中東では後で、「あっ、ごめんなさい」と謝れば大丈夫、といういい加減さがあります。これは半分冗談で、モーセの律法の中に貧しい人々のために、隣人の麦畑の中に穂を手で摘んでもよい、しかし、鎌を使ってはならないという戒めがあります(申命 23:25)。弟子たちはおそらく、イエス様と共に忙しく動いていて、食べる暇もなかったのかもしれませんが。この時に穂を食べたのです。

この時にパリサイ人が、これは安息日にはいけないことだと言いました。これは、穂を摘んで食べることは、労働していることだと言い伝えの中で解釈していたからです。つまり、穂を摘んで、実を食べるために手でもみます。穀を取り払うためでもあります。ですから、これは脱穀をしている行為なのだということなのです。

そこでイエス様が取り上げた話は、ダビデと供の者たちがひもじかった時のことです。サムエル記第一 21 章に出て来る話ですね、サウルからの逃亡生活が始まる時に、ダビデがまず向かったのは、祭司の町ノブでした。そこに、当時は神の天幕がありました。そこで、食べる物を求めたのです。祭司アヒメレクは、普通のパンは手元にはなく、週ごとに取り替える臨在のパンならばあると答えました。けれども、それは祭司たちが食べるものになっています。そこには、神の憐れみの原則が働いているのです。神は民に律法を与えられました。そして、取り替えたパンを祭司が食べるというのは、神の命を自分たちもあずかり、ちょうど聖餐式と同じ考えです、神と自分が交わることによって、自分たちが神の聖さにあずかることを意味しています。しかし、実際にひもじい人がいた

ならば、その限りではありません。つまり、神の憐れみがそうした規定より優るのだということです。

そしてイエス様は、彼らの根本的な問題を指摘されます。「人の子は安息日の主です。」です。人の子というのは、エゼキエルのような預言者に使った言葉で、文字通り、人間の子という意味があります。けれども、ダニエル書には、明らかにキリストご自身を示す呼び名です。人でありながら、キリストであることを示す言葉であり、イエス様は中風の人を癒される時も、人の子に罪を赦す権威があるとされました。その人の子が、安息日の主であるということです。彼らは、律法を守るべく解釈して、その解釈に基づき動こうとしました。しかし、その過程の中でいつの間にか、自分自身がそれらの解釈を決める主人であると、言葉には出さないですが、そう思っていました。主客が逆転してしまっていたのです。神の名を語り、神の律法に従っているようなものが、人間本意になってしまったのです。神に仕えているつもりが、神を利用していたのです。私たちは、イエスが主であるということを口で言うだけでなく、事実、自分を捨てて、この方こそが主なのだという立場を、自分を新たに御霊によって変えていくことによって、保って行かないといけません。

## 2B 善行において 6-11

6 別の安息日に、イエスは会堂に入って教えておられた。そこに右手の萎えた人がいた。7 律法学者たちやパリサイ人たちは、イエスが安息日に癒やしを行うかどうか、じっと見つめていた。彼を訴える口実を見つけるためであった。8 イエスは彼らの考えを知っておられた。それで、手の萎えた人に言われた。「立って、真ん中に出なさい。」その人は起き上がり、そこに立った。9 イエスは彼らに言われた。「あなたがたに尋ねますが、安息日に律法にかなっているのは、善を行うことですか、それとも悪を行うことですか。いのちを救うことですか、それとも滅ぼすことですか。」10 そして彼ら全員を見回してから、その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。そのとおりにすると、手は元どおりになった。11 彼らは怒りに満ち、イエスをどうするか、話し合いを始めた。

安息日論争が、エスカレートしました。律法学者とパリサイ人たちが、イエス様が教えておられる会堂のところに、右手の萎えた人をそこに連れてきたのでしょうか。イエス様が明らかに、奇跡を行われることを知っているからこそ、彼らはじっと見つめていたのです。先には非難だけでありましたが、ここでは、敢えてイエス様が律法に違反するように罾をしかけているのです。しかし、イエス様は怒って、彼らの頑なさを嘆き悲しんだとマルコの福音書は記しています。それは、憐れみの行いを彼らは安息日の違反であると教えていたからです。安息日に善を行うこと、また人の命を救うことが律法にかなっていることでしょうか、と語られています。イエス様は、彼らがそうした憐れみの心を失っていることに対して嘆き悲しんでおられたのです。

彼らの反応は、悔い改めではなく、怒りに満ちたものでした。イエスをどうするのか？話し始めたと思いますが、後にそれが殺意へと変わって来ます。恐ろしいですが、これが現実です。人の心はそんなきれいなものではありません。普段は、秩序が保たれているので表には出ませんが、いざイエス様に触れた時に、その深いところにあるものが一気に出てくるのです。律法学者やパリサイ

人は、自分たちが律法の擁護者だと思い込んでしまっていたのです。しかし、イエスに触れることによって、自分ではなく神なのだということを迫られたのです。しかし、思い直すことなく、むしろ怒りに満ちたのです。主が、アベルのいけにえを受け入れ、カインのを受け入れなかったので、カインが怒りに満ち、落ち込みましたが、主は、「あなたはそれ(罪)を治めなければならない。」と注意したのに、それでも言うことを聞かず、アベルを殺しました。

## **2A 十二使徒による宣教 12-19**

このように、古い皮袋に新しいぶどう酒が入れられてしまっているような状況が一方であります。けれども、他方で、イエス様の召しにこたえて、イエス様に従っている新しい皮袋の弟子たちがいました。イエスに反対する力が働いていると同時に、主の支配の中で動いている新しい動きがあります。イエス様は、その働きを治めるべく、十二人の弟子を選ばれるのです。

## **1B イエスによる選び 12-16**

12 そのころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。13 そして、夜が明けると弟子たちを呼び寄せ、その中から十二人を選び、彼らに使徒という名をお与えになった。14 すなわち、ペテロという名を与えられたシモンとその兄弟アンデレ、そしてヤコブ、ヨハネ、ピリポ、バルトロマイ、15 マタイ、トマス、アルパヨの子ヤコブ、熱心党员と呼ばれていたシモン、16 ヤコブの子ユダ、イスカリオテのユダで、このユダが裏切る者となった。

イエス様は、一人一人呼ばれた弟子たちのことで、一人で夜を明かされるほど、神に祈っておられました。つまり、父なる神の御心を求めて、御心の中で選ばれた十二人ということです。イスラエルに十二部族があったように、神の国を新たに治める者たちとして十二人を選びました。そして、彼らには、「使徒」という名を与えておられます。これは「遣わされる者」という意味です。主の権威と使命を帯びて、遣わされていくところで福音宣教の働きをします。それが、同じルカの書いた「使徒の働き」の中に見ることができます。この使徒たちが主によって権威が与えられて、今の教会が成り立っています。パウロは、エペソ2章の最後で、「2:20 使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられていて、キリスト・イエスご自身がその要の石です。」と言いました。そして、主が再臨された時に建てられる神の国では、彼らはイスラエル十二部族を裁くことにあるとイエス様は言われます(22:29-30)。そして新天新地の天のエルサレムには、門がイスラエルの十二部族の名が記されており、都の土台石が十二使徒の名が刻まれている宝石になっているのです。

ゆえに、私たちは十二使徒の権威の中に生きるようにされています。教会は、パンを裂き、祈り、交わりをするのですが、何よりも使徒たちの教えを堅く守るように命じられています。この新約聖書を学ぶということはまさに、彼らの教えを守ることに他なりません。そして、神の国が広がって行くのです。

## 2B 大勢の弟子と群れ 17-19

17 それからイエスは彼らとともに山を下り、平らなところにお立ちになった。大勢の弟子たちの群れや、ユダヤ全土、エルサレム、ツロやシドンの海岸地方から来た、おびたしい数の人々がそこにいた。18 彼らはイエスの教えを聞くため、また病気を治してもらうために来ていた。汚れた霊に悩まされていた人たちも癒やしてもらっていた。19 群衆はみな何とかしてイエスにさわろうとしていた。イエスから力が出て、すべての人を癒やしていたからである。

使徒たちを選んだのが山の上でした。そして下りて行って、平らなところにお立ちになります。それはあたかも、神が降りて来られて、新しい十二人の使徒たちの体制によって御国が広がることを象徴しているかのようです。ここに、おびたしい数の人々がやってきました。ここで特徴的なのは、大勢の弟子たちの群れがいたということです。イエス様の教えを聞いて、この方を自分の教師として、主として従おうとしていた人々であります。そして、これまでと同じように病を癒してほしい人々、また汚れた霊で悩まされている人々がやってきました。捕らわれ人を解放するというイザヤの預言がこのような形で実現しています。

注目すべきは、働きが広範囲に及んでいるということです。ガリラヤをはるかに越えています、ユダヤ全土、エルサレム、そして、「ツロやシドンの海岸地方」とあります。そこは異邦人の住むところでもありますから、異邦人も群衆の中に混じっていたということになります。イエス様の宣教の働きの後半部分で、その地域のカナン人の女が、娘が悪霊につかれているということで、イエス様のところにやって来たことです。そこまでイエス様の名が広まっていた。イエス様は、まだイスラエルの失われた羊を探すために来られていたのですが、そこから異邦人にまでご自分の名が広められる原型を、ここで見ることができます。

## 3A 平地の説教 20-45

そして次から、イエス様の説教が始まります。新しい神の秩序に対して、主が権威をもって宣言していけます。これが神の国の中に生きる者たちの姿であり、また生き方であります。内容は、マタイによる福音書の山上の垂訓と似ていますが、けれども、少しずつ違います。主は、ガリラヤの町々を巡回されて教えておられたので、内容的には同じことをいろいろなところで語られました。したがって、数多くのことをイエス様は語られますが、流れを追っていきたいと思います。主はこのことを、一気にお語りになられました。その中で何が大事なのかを見ていくのです。

## 1B 幸いな人と哀れな人 20-26

20 イエスは目を上げて弟子たちを見つめながら、話し始められた。「貧しい人たちは幸いです。神の国はあなたがたのものだからです。21 今飢えている人たちは幸いです。あなたがたは満ち足りるようになるからです。今泣いている人たちは幸いです。あなたがたは笑うようになるからです。22 人々があなたがたを憎むとき、人の子のゆえに排除し、ののしり、あなたがたの名を悪しざまにけなすとき、あなたがたは幸いです。23 その日には躍り上がって喜びなさい。見なさい。天に

おいてあなたがたの報いは大きいのですから。彼らの先祖たちも、預言者たちに同じことをしたのです。24 しかし、富んでいるあなたがたは哀れです。あなたがたは慰めをすでに受けているからです。25 今満腹しているあなたがたは哀れです。あなたがたは飢えるようになるからです。今笑っているあなたがたは哀れです。あなたがたは泣き悲しむようになるからです。26 人々がみな、あなたがたをほめるとき、あなたがたは哀れです。彼らの先祖たちも、偽預言者たちに同じことをしたのです。

イエス様の出だしに言われた言葉について、午前礼拝でじっくりと見ました。ここでご指摘したいことは、イエス様が「幸いです」と言われる時に、それはあくまでも今現在の状態を示す宣言だということです。つまり、「あなたは貧しくならないといけない。貧しくなれば、神の国の一員になれる。」というのではなく、もう「あなたは心貧しい者で、幸いなんですよ。」と太鼓判を押しておられるのです。私がたまに、太鼓判を押すような感じで、「みなさんは、主にある戦士なんですよ。恵みによって立っているのです。勝利者なのです。」と確信をもって宣言することがありますね。そうしたことをイエス様はしておられるのです。心貧しき者になっている。また、神の義を求めて飢えている。そして、今の状態をよしとしておらず、悲しんでいる。そうになっているあなたは、幸いですと宣言しておられるのです。言い換えれば、神とお一人お一人との関係を示しています。金持ちの青年のように、「何をすれば永遠の命を得られるのでしょうか？」というような、何かを行って得られるものではないのです。

それと同時に、主は、選り分けをされているのかもしれませんが。大勢の弟子たちが集まってきました、その中には富んでいる者たちがいたかもしれません。主の前で圧倒的な至らなさを感じているのではなく、自分に満足している人たちです。ですから、富んでいるあなたがたは哀れですと言われたのかもしれません。そして満腹している、自分は満足しているのならば、哀れです。そして、ちょっとあざ笑うような様子を示していた弟子たちもいたかもしれません、そうしたらいずれ泣き悲しむようになると嘆いたのかもしれません。イエスの前に出るということは、心を貧しくするか、あるいは心を太らせたままにしているので、退けられるのかのどちらかかしかないでしょう。主が再臨される時に、諸国の民が集められて、羊と山羊を選り分けるように、右と左に選り分けるというようなことを、今、ここで行われているかもしれません。もちろん、ここでイエス様が哀れだと言われた時に、思い直した者がいるならば、その人は列記とした貧しい人です。

## 2B 敵への愛 27-38

そして次から、イエス様は、弟子たちに対して最も大きな命令を与えられます。それは、「愛すること」です。しかも、敵をも愛することであり、人間の持つ愛ではないことを初めから明らかにされます。先の20-26節が、これこれを行わなければいけないという行動の指針ではないことを強調したのはそのためです。貧しい者、飢えている者、泣いている者、その中であって神からの幸いを得ているのです。罪の赦し、神の慰めを受けているのです。その神の愛のいわばバプテスマを受けているのであり、その神の愛をもって、イエス様に付いて行くように召されています。イエス様は、弟

子たちには安息日に麦を摘んでいくようにされて、また右手が萎えている人を癒されましたが、そういう愛の行いの中に生きていくように命じておられるのです。このことは、旧約の時代も神は、ご自分の愛を民に示されていたのですが、今、キリストが来られたことによって罪の赦しと慰めを実践するするように命じておられます。

### 1C 自分を憎む者への愛 27-30

27 しかし、これを聞いているあなたがたに、わたしは言います。あなたがたの敵を愛しなさい。あなたがたを憎む者たちに善を行いなさい。28 あなたがたを呪う者たちを祝福しなさい。あなたがたを侮辱する者たちのために祈りなさい。29 あなたの頬を打つ者には、もう一方の頬も向けなさい。あなたの上着を奪い取る者には、下着も拒んではいけません。30 求める者には、だれにでも与えなさい。あなたのものを奪い取る者から、取り戻してはいけません。

22 節で、イエス様は、ご自分のゆえに憎まれて、排除され、けなされるならば幸いですと言われていました。そのように自分に敵対する人たちがいても、神の愛は変わることがないのだから、愛しなさいということです。つまり、相手が誰であっても、神が愛であるから、その相手ではなく神の愛に応答して、愛するのです。具体的な命令をイエス様は行われています、自分を憎む者がいても、それでも善を行いなさい。呪う者がいても、自分は呪い返すのではなく、祝福しなさい。そして自分を侮辱する者がいたら、その人のために祈りなさい。

29 節は、イエス様はちょっと極端に言われていますが、頬を打つということが実際にキリスト者に対して行なわれます。いや、イエスご自身が平手で打たれましたね。また上着を取って行くということ、それから求めて来るということ。こうしたことは、日本社会ではあまりないでしょうが、当時の社会、風紀が乱れていたような状況では起こっていたのだと思います。ですから、ここを文字通り自分たちの生活に当てはめられないからといって、無視したり、あるいは自分にはできないと落ち込んだりしてはいけません。日本の状況であれば、自分に何か悪いことしてきた人がいても、仕返しをするのではなく、むしろ復讐を神に任せて、神が憐れみ深いように憐れみを示すということです。そして怒ったり、仕返ししたりする動機には、高ぶりがあります。自尊心といったらよいでしょうか。そういったものは、主にあって捨てて、柔和さ、へりくだりをもって接していくということです。

もう一度、思い起こさなければいけないのは、これは人ができる業ではないことです。御霊の愛に満たされなければできないことです。イエス様は既に、「幸いです」と宣言してくださった、その神との関係に留まっていることによるのみ、自分を捨てて、初めて従うことができます。

### 2C 見返りのない愛 31-36

31 人からしてもらいたいと望むとおりに、人にしなさい。32 自分を愛してくれる者たちを愛したとしても、あなたがたにどんな恵みがあるでしょうか。罪人たちでも、自分を愛してくれる者たちを愛しています。33 自分に良いことをしてくれる者たちに良いことをしたとしても、あなたがたにどんな

恵みがあるでしょうか。罪人たちでも同じことをしています。34 返してもらうつもりで人に貸したとしても、あなたがたにどんな恵みがあるでしょうか。罪人たちでも、同じだけ返してもらうつもりで、罪人たちに貸しています。

ここから知らなければいけない原則があります。「愛するとは、人相手ではない」ということです。相手と自分だけの関係で、愛することを考えてはいけないということです。人は必ず、「お返し」という性質を持っています。相手が良くしてくれたから、自分も良くするというお返しです。あるいは、自分が良くしたから、相手から良くしてもらおうということです。

35 しかし、あなたがたは自分の敵を愛しなさい。彼らに良くしてやり、返してもらおうことを考えずに貸しなさい。そうすれば、あなたがたの受ける報いは多く、あなたがたは、いと高き方の子どもになります。いと高き方は、恩知らずな者にも悪人にもあわれみ深いからです。36 あなたがたの父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くなりなさい。

父なる神を相手にして愛するのです。敵を愛しなさいというのは、何も自虐的になれということではないのです。自分をも殺して愛するというのは、本当の愛ではないです。今、DV であるとか、パワハラ、モラハラという問題がありますが、そこでマインドコントロールされて、キリスト者の場合は、この「敵を愛しなさい」という言葉が使われます。しかし、それは人相手を前提にした適用です。危険です、敵を愛するとは自分を殺すことではありません。ここに、いと高き方の子になりますとあるように、神を自分の父と仰ぎ、その憐れみに自分自身が触れ、それゆえ自分の神に倣って、この人に接するというようにしていくのです。福音宣教において、キリスト教に敵対的なところ、あるいは無関心なところに行く時に、このことはフルに発揮されます。そして私たち教会が、このことをフルに発揮します。

### 3C 裁くことへの戒め 37-38

37 さばいてはいけません。そうすれば、あなたがたもさばかれません。人を不義に定めてはいけません。そうすれば、あなたがたも不義に定められません。赦しなさい。そうすれば、あなたがたも赦されます。38 与えなさい。そうすれば、あなたがたも与えられます。詰め込んだり、揺すって入れたり、盛り上げたりして、気前良く量って懐に入れてもらえます。あなたがたが量るその秤で、あなたがたも量り返してもらえるからです。」

敵を愛するということに続いて、裁いてはいけないとイエス様は命じられます。これがどうつながっているかと言いますと、すべては神が主権の中で起こっていることであって、それを自分自身で判断してはいけないということです。私たちは知りたいという欲求があります。なんでこんなことが起こるのか？と原因探しをしたくなります。けれども、そうした判断は主にお任せする必要があるのです。しかし、その神の領域であるはずの裁きを私たちが行い、相手を不義に定めることは容易に行なってしまいます。その時には既に、自分自身が主となってしまっているのです。先に、イ



イエスが「人の子は安息日の主です」と言われました。私たちが、全てのことを把握しようとする欲求を満たそうとすると、サタンの誘惑を受けてしまいます。

ですから、神の力強い御手の下でへりくだります。そして、自分は赦しに徹底します。そこで主は約束を与えておられます。自分が赦し、また与えるという世界で生きていけば、自分のところに与えるという世界が広がるということです。赦しの文化、分け与える文化が広がります。こう考えるといいです。主はおられます。主は敵をも愛する、愛の中におられます。後は我々が、この方の支配の中に自分を置くことです。従わせることです。そうすれば、その愛に満ちた、分け与えに満ちた領域を味わうことができるということです。

### 3B 自己の訓練 39-45

そして主は、こうした愛の中に生きるには、訓練が必要であることを説かれます。

39 イエスはまた、彼らに一つのたとえを話された。「盲人が盲人を案内できるでしょうか。二人とも穴に落ち込まないでしょうか。40 弟子は師以上の者ではありません。しかし、だれでも十分に訓練を受ければ、自分の師のようにはなります。

私たちの間違いは、「盲人」のまま盲人を案内しようとすることです。自分はまだ目が開かれていないのに、相手を直そう、相手を救おうとすることです。自分自身がへりくだって、その中に生きていないのであれば、盲人が盲人を案内するような状況に陥ります。

そして次のイエス様の言葉が興味深いです。「弟子は師以上の者ではありません。」と言われていきます。当たり前ではないか？と思われるかもしれませんが、意外に私たちは師匠であるイエス様以上になろうとします。どういうことか？イエス様は、全ての人を救うことはできなかったし、しませんでした。それなのに、ある人を救いに導くことができなかったので自分の責任を感じます。イエス様は多くの弟子を躓かせました。多くの人がイエス様から去って行きました。自分が育てようと思っていた、新しく信じた人がいなくなったので、自分を責めることがないでしょうか？私たちは、自分自身に向うにしる、他者に向かうにしる、イエス様以上になろうとしているのです。それで他者であれば、注文をつけ、自分であれば自責の念で悩みます。でも、イエス様以上になれません。

けれども、十分に訓練を受ければ、自分の師のようになれるという一般原則を語っておられます。イエス様に倣いながら、訓練を受けるのです。

41 あなたは、兄弟の目にあるちりは見えるのに、自分自身の目にある梁には、なぜ気がつかないのですか。42 あなた自身、自分の目にある梁が見えていないのに、兄弟に対して『兄弟、あなたの目のちりを取り除かせてください』と、どうして言えるのですか。偽善者よ、まず自分の目から梁を取り除きなさい。そうすれば、兄弟の目のちりがはっきり見えるようになって、取り除くことがで

きます。

訓練の内容とは、自分の目の塵から取り除くことです。私たちの弱さは、他の人の欠点は見えるが、自分のは見えないということです。人を裁いている時に、実はその裁いている内容が、自分自身をもっと大きな規模で自分も行っているということです。塵を取り除こうとしているところが、実は自分の目に梁があるのです！パリサイ人や律法学者がその過ちに陥っていましたが、彼らは人間そのものです。私たちはその性質からパリサイ派的なのです。ですから、主にあって、御言葉に照らして自分自身を吟味し、そして過ちを聖霊によって示されたなら、その道を正し、義の道に生きていく訓練を受けるのです。

43 良い木が悪い実を結ぶことはなく、悪い木が良い実を結ぶこともありません。44 木はそれぞれ、その実によって分かります。茨からいちじくを採ることはなく、野ばらからぶどうを摘むこともありません。45 良い人は、その心の良い倉から良い物を出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を出します。人の口は、心に満ちていることを話すからです。

訓練と言いますと、何か行動療法のような、行動を正すように聞こえるかもしれませんが、そうではありません。あくまでも、キリストとの関係の中で行っていくものです。ここでイエス様が使われている喩えは、イエス様という良い木に私たちがつながることです。イエス様との関係を深めることによって、初めて実を結ばせることができます。それが、自分自身という枝であったり、他の何かであるならば、その実しか出てこないのです。いわゆるハウツーのものがキリスト教会にも入り込んでいます。そうして自分の行動を改めようとして、ずっと前進していたら、気づいたら出発地点に戻っていたというような、霊的な迷路の中に迷い込んでしまうのです。イエス様につながるということ。

それから、心を取り扱います。私たちは行動を気にしています。けれども、心は自分自身でもどうなっているか気づくのが難しいのです。パリサイ派のように、行いはそれらしく振舞おうとしても、心がなおざりにされているので、墓を白く塗って行く状態になってしまいます。しかし、心とイエス様の心が触れる時に、私たちは清められます。そして自然に自分から出て来る言葉が、恵い深いもの、人を建て上げるものに変えられるのです。

そして最後に、二つの家を建てることについて見ていきます。そこに、今、話した、イエス様との関係づくりについての具体的な喩えが書いていますので、次週学びたいと思います。